

912.3

力

卷之三

以原書

議

人女

和

院



卷之三

春日龍神

月

月の夜をもむらむと風の吹きもと
あむと月入る夜の月

四

志郎は法師ゆく。我の庵渡たれをと
ひよどり見此の界み心胸乞ひ。是より度
ひ上、
ひや心象が山擣りを拂ふ事にみづかく
をひあく八の恩れ松緑のをとも家あり

都の事は御内閣の事と
食ひ事は御内閣の事と
くに越後守の事と
おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と
おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と

おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と
おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と
おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と
おもひ事とが事とが事と
いふ事とが事とが事と

ハタチの心が思ひ度す。此の事は
ハナシの事で、唯今ま活かれて
の儀が手紙入寮後志の承り。少
細だゆく事活て、豈れども其業
の如きは、此を也の如きに於ては、
おもむく、其の如き事の如きに於ては、
おもむく、其の如き事の如きに於ては、
おもむく、其の如き事の如きに於ては、

卷之二
七言律詩
一
送人游蜀
王維
朝辭白帝彩雲間，
千里江陵一日還。
两岸猿聲啼不住，
輕舟已過萬重山。

をうなづくもぬとの津あらりてれども
ハ武光院のとくあれがほんせきくわざれ
むれ乃ぬよくてゆりて移歎とあるが
よまセ神魚（古一）史修纂
御とて五との御代よどきつて二重流布
乃め透今我物乃は良也 犯めて久
廣後天の日佛流布の名と云う

とおりゆんああまびばうそ御免にゆき

え音もよみゆかれ、香人萬秋神あの御

上
赤良坂のじゆと食せられ殊どぐるる

日上

をやひの守かがき、三重乃森れ事あ。

く風もゆぬよ枝とれ青白山跡も元

鶴が廉さんも皆もくくがゆ八勝と

折角とすすり上とれ深うかほのあわ

をうなうともゆまの済ちうりてうとま

ハ武藏跡のゆくむれが巨はぬくわされ

む井乃海よくもゆうて御免とああり

よまを神氣ひとむらありまをう史ひ流東

洋とて五との御代よびゆうて三重流布

ため通今御約乃は良きもやれかて人

廣後天の山も佛法流布の名とさり

日二二二二二二二二二二二二二二
佛はとゆあんあそり。天をひとわらへ
くる。比叡山にあらず。おき山の山もあらず
有飛流波とゆどく。ひづる雲霧山
今や虎生とぞれん。ちの林とおほば
よえがまほへ。作努れゆふらむ。春
日乃あかとねじゆ。我とせぬ。年、
尾佛せん。ゆくわきにゆのばんとぞすと

シ二二二二二二二二二二二二二二
ハのゆ林ゆもあたあり。猪もハ猪もあふ
矣也あひれ林。渕のまのと厚とがく。ゆ
小枝も虎生の益あひとゆ。ひ猪も虎生
櫻豫細櫻乃衣と曉廉聲の散むとがく
てに猪も虎はとぞれかの。廉聲苑も安
あす。焉自知よあさかとハ廉り園かく
もや。もかあ松のむ宿の。山を雲見

新すすや春日をゆひに引まく機のとは
かく春日山文徳もあわびてりもんじふ
乃ち寺川もみくえをあまうせむるけは
あ花もへき様の教も春日野の春うえ
のゆかりまれ （元） 駿河山もあひ頃て入鹿後
去れ事よりうゆりてしづくく山原と
いひを （ト） はとももあ焉てわたりわざば今

霄ひとと來し鶴也（ニシテ）の山にゆたをう
け、摩耶の誕生 （アマヤ） 伽耶の成道 （カヤ） 菩提
の説法 （セツハ） 雙林の入滅也（スルモニカニ） 也
を極て、將軍にゆだへ（ミタケル） と本佛にゆく本佛の
死絶を厭風も行なうとぞかくきれ様よせ
にきりく （上） 時より震動ともハ。少焉象
の轟音れど況々とばく民國の震動せり。財界

トヨヒトトモヒツシハ其がね法界那
日トトニトモヒツシハ其がね法界那
天王又持法界那羅王樂軌圍塲

七

王樂軌圍塲王樂軌圍塲王
羅睺阿修羅王乃頂少於眷屬引連く
先もやれく度列さり於安うたらあ波
洞の祇くゆめあうちや永界本の波浪を
ぬまづくを縁のをえよもんの海多度澳
ゆくより次月れひ每度佐保代作ゆけにう
ひ峯八 大龍王八大龍王八の冠

年號

大震動動もく下界れ詠歌代參うハシハ
八方詠よ（タク日）ハ慈通範主（タラ）駁難通説主（タラ）
波加羅範王（タラ）和供者詔主（タラ）德文通範

波加羅範王（タラ）和供者詔主（タラ）德文通範
王阿那婆達多詠よ（タラ）而も眷属門（タラ）を
く率彼よ波潤（タラ）とちて佛戒念社（タラ）に詠
第一日（タラ）と徳波也（タラ）其がかね法累那
波主（タラ）又持法累那罪主（タラ）樂軌圓壁

（龍王）

王（タラ）樂軌圓壁主（タラ）樂雅阿修羅王（タラ）
羅眼阿修羅王（タラ）乃極沙比眷属引連く
毛もわれく度列きり（上）於妄うたら歎吸
洞の神（タラ）迦毘尼（タラ）也綠の毛々もひの海を度澳
波もうちて舟也（タラ）舟也（タラ）伊保林也（タラ）舟也（タラ）
入也（タラ）八方範王（タラ）八方範主月八の冠

と云ひけ 所を春日御の月のニキの
やうのうりがよきうて死ぬる所も
生て又や度耶の延生鷲舉ひ後法
み林乃入城せりけりて老病もありや
ゆゑと人を入城せら ト、
さへたわすく 日 ト、
ぬ角や ト、
の事

の事で移安を東方に移しゆけ下す
猪を猪の波多を波多をもとをも
ゆけあ尋の太輔とがくおひづ
るは小蟻をしきとう金とくを
せう

大正詞

太原川幸

豊きは川乃流みは（すれ）はるか也
ねむ波夜先帝ニ後歎とくわをも
年家の二門長門がよやまと浦かく
患累病ひくひ久院毛所力とくわ
きゆくひとくわをもと重慶な
き御命（ひめい）をうゆの荷守荒

豈らば白鳥乃流みに
事事乎は也

ねとも此處更に帝二位歎とくもめを

半家の二門長門ゆきよも叶浦あ

毛心界のゆひひ久院毛市毛とくも

れ、九郎左衛門判官義經兄弟才徳存一
ヤニ行の外室あくゆてもく都に御望
待ひひまち経へ女院がおよみせ給
ぬ魚りしと先帝安徳を官代御著
櫻井に二位殿の御跡と御弔の事は
大原比第光院よほ世どもひ御庭
をきめれいと法皇御幸ときめれ常

ひわくまよの就宣あく御間、豊岡山
駿とよア村もやとみ、ひたねもと大
雪の御幸あるきまれハ御幸比道も
作、毛唐、山、作、サミ、山、未上、山、
お車もとあきせのとよひらをまん
往より下御幸あれ、都の方れま
往をよそとてゆるをかまわうじ

在
在
在

德已官九卿若

與之清席乃空

之士清庭

事事無常

かまひき行極幸承に付て物思へせ
く有あたらそ安らひれり折にじゆうり
れとやまとせら上^ミ_ス駆^スのれあるの肴のもく
根の風搖の色^{四ナ}あはれ此^ハあうてハ薄れ也
毛^{四ナ}けらあめん人稀^{一元}よ盛^ハもす葉^{一元}が^ト御^{二元}
秋^{二元}まひにあひを思ひのひ情^ハとを西原
憲^{二元}うとわ^トともうれりかよ神^ハの懸^スく

ゆてた納^スの爲^ハうゆのゆよゆう
橋城^トひし^ト局^ハりふも河^ハ徳^ハ荒

木^ハ巖^ト折^ハ源^ハ結^ハよゆ^トうん^トだ
て^ハひん^トに事^ハあれも患^ハ達^トな
き^ト海^ハ飯^トあ^ハお^トと^ト櫻^ハ特^トく乃^トす
き^ト通^ハ所^トあ^トと^ト菜^ハ摘^ハみ^ト汲^ハ蘿^トと
まくあく^トに^ト祖^ハり^ト一^ト飯^ハよ^ト食^ト

引

のあかれて御見ざりくおふ
浦へゆく
中へ王
立中納言九の重み花もあら
強とみるやも繫ともよし山詠ふ
さびれ霜もあらもよくな原にれ
まいそん 行幸ともあらゆる
行幸ともあらゆる

立原へゆく

かくて立原

立原へゆく 寂光院のみまみとる原
せじあひひよ庭の夜草をもりわ
て青御坐とひすい池の夜草を
みゆれく錦とひひとひうがる
をふねき候机八室を書めとくら
山府鳥の一色も君の御まと待つ
かり 立原へゆく

他よりにけの稀松へきて波のたうと
豊もりきれ日高上

木あらひりるるあひゆすも

唐あづか水の音さへすわりく
保羅乃埴羽平雀日高下黒乃山日高上よか大筆
みちひびく日高下一宇日高上おまといは被
坐日高下也日高下鷺日高下乃貴日高下成日高下たとほと
着日高下也日高下もまた常經日高下乃打日高下とかくと

やくが原日高下物日高下もくこれえ

菟院の御菴室日高下までわたりてひか日高下軒日高下あら
ひき檻日高下ひひふれ藜蘆日高下ほくらむり
かの物日高下もくのむすぶあひひじぬ日高下葉
門内作日高下波日高下もく海日高下のむそ日高下風日高下方

黒の巣日高下の申納日高下をあくひ日高下されぬ

舟拂城山岸日高下を何とぞ御風日高下の風

まことに奥院の御姫君御吊の為に

内侍

あれを御奉りての 奥院はよのと見

ゆきに御坐あく。今やひめをわくい

御奉りよ。アヒハが院やうとの御

おひまにゆかみく。今やひめをわく

アヒハが院やうとの御奉りよ。アヒハと御

待わす。あひく。

王

尼塔、ゆきいわう者を

内侍

坐にく御見

玉すま六御程。されば娘西り娘。阿波乃

内侍うちわりとあくまく。角深乃

安治あかくら。おほきともあくまく。御身か

きハ恨むれ。思ひて思ひて思ひて思ひ。八

きのくふ波ひ。か虎さよのよ

花びらに御坐あく。八根御法事

内侍

王

か耶も此房。今汝もさへあつゆ
色度そ御ゆくゆくへ きのふも
もれすもゆくもれんといわすとも
もれゆるゆゑあきく。所を帝に拂ひ新
馬を深くよもびし。極重恩へ無
他方復か称彌陀得生極樂。主と
ともゆる。主上之臣歟。門のくわ威等

観音無阿彌陀佛

や、菴室のわざり

ひ人者のまひ。ちくく是れ御やひ
ゆく

ぬみくまうぬ

よそ御まう女院大翁

言のあひゆす

内侍

を拂ふや。女院かく御せ拂ふ丸す
まひ折さくあり。大翁言の房あり。い

うやかまし曾我師事めくまくぬ
中へたがふあらわのぶんぬのせとどもを
御そぞうひ名とまづりせとをばくはれり
雨袖のをとまづりゆや。さへおりま
ほりくわが道ふとまひが足アカ上カ下タ
宿サクの前マハへ。撫衣ムツヅのえぬよ朝アサヒく
十念ジンの聲ヨメ此シ處スルか。聖光セイコウの來迎ライヨウを待マダラ

はあがめうりうりうりうりうり
かともと西ニシの瀬マツシか。萬マツ君家クニ
歟マタタキのあまひくわくわくわくわくわく
荷ハタケせう室マツ名ナミ綱ハタケとわ海シマれ波ハタケれ月ハタケな
らえ見マタタキゆ今マタタキも強マタタキさん。根ハタケや佛事マツシヤの
折ハタケをまくわくわく。財マツシヤもまん。春マツシヤ
暮マツシヤもまん。か秦マツシヤの折ハタケまれてもまくわく

あらえあきまの名前をゆめ
日上 遠よみがに雪ふらひの花の聲
一也 日上 菓草のもげとくもとくさく
か入路ふ道のま 客とやく実寐
光の森底光の底とある。ひり
乃陰もあきむけとむね桜小咲を第
池の膳飯を外す。されも御幸と

侍ほれ 喜葉くもとの庭楊初花
ありも秋うへ津くすう管がみ移と表
と、歎慮あひゆくもがくひがよば脚
舞葉の扇乃あくうわももくき往
居處あくやく 黙もあくはふの奥
の後承と雲井の舟と余舟かさんと
がくとあくよ近山里まくわゆ

身の爲めに猶かといひ乍ら此の事
かの身の爲めに猶かといひ乍ら此の事
を此佛弟子は佛菩薩の徳を
見て見ゆる所の事と爲り
初宣の者心事かといひ乍ら此の事
されんと爲す事かといひ乍ら此の事
きの事かといひ乍ら此の事

是身と爲むがいかむかといひ乍ら此の事
善い事かといひ乍ら此の事かといひ乍ら此の事
萬物の事かといひ乍ら此の事かといひ乍ら此の事
日も月も星も事かといひ乍ら此の事
がくの事かといひ乍ら此の事かといひ乍ら此の事
西の事かといひ乍ら此の事かといひ乍ら此の事
かといひ乍ら此の事かといひ乍ら此の事

モニ鐵鬼道のまゝあり。又左衛門汀の城
乃モア城山にうりて、ハシムの城也。トカウル
モ城也。モアシヒナシヒナス。ハシムの眾
ハシムカニヤ、流すや。隣のあちへニ
財、一里、星也。城より月也。高麗、波羅道の
あひわおもて海、やうくの駆けひつ
め。モ高麗の高生道のうち移と爲す。
モ高麗人道のうちもとももももももももももも
の裏を出る。城より存取之事也
於板先帝の御家期のモ標何と後
黑の波、御物後也。其のモ標
たれてももや長門國ももももももも
ゆきびとまもももももももももももも
モアリよ孫方の三所の勝ちをかくに。

薩ナニシヤ原さんやせり折角
やり廻ふまへらまじ今にかよく見ち
處に能登守教姫を、お義理の前兄弟を
たるの勝よしと、家朝の儀せよもて
海守に参入トガニニツバシ、新中納てお盛を
冲あつ私ひいろとけわけ、甲とやらん
みひよにめれとされ、家長よぢよぢよ

さううう、やあ、海守とひよせ。トミテ
二位敵か姫色のふたりも、浦りとも、
内をよもよもとくと、我あら姫、うり
とも、敵のよもよもとくと、主よおは
修やんと、安徳天皇の御よとらり船
もよだのもよぶらく、舟をとわきくち
いた、船よもよけさきんかくが、

深らる處所あり。舞樂也。月
半食而此波の下にまづ城あれ。師
をす。すもんと、度々奏へ。其處
はもとびへひづりをあまひ天無
皇御小御船もせ候ふ。又大會乃
爲に西よりせあり。ゆきと日未
山裏濯河の源も小波れ底もお

有と。元
豈と。窮約の御御身もと。すれ
乃そと。然ふかくも。波をさへ有
いと。浦のまを。戸地一ト
余ち。二役。匏部かねり。かく
洞よ。神とあがう。於て。きづかまむ
御名跡。やひそ。をほくぬ。まく。や。還事
ともしき。がく。を興。ともあらむ。

宿光院とおゆかへ、
宿院の柴のな
里、
あらわゆる見どくを残すく所巻
室よ入候ふ

鐵通

秋の夜を遙り、暮の聲を残すて、
むは候てあん。是を紀考するが爲
我れされ道にうきりとつたまむ者
如は候てあらひ宿院の柴とらひ立紀
志の様にわらひまほくや草木の繊う
てんせん。かくして、
てんせん。かくして、

於れをの月れとぞとと思ひ度る
もあがめにてよほり、われより、
ゆふ思ひきあり、尋ねらるく、暮春也
故の日れ西からまきを垂れ有ぬと
うがねとわざまく、かはれ、此時
で、やがて、廣す、廣の西れあり、まひ
と、雅趣すと、廣えいすと、ほもが

あせりしやひ、深湖の葉れ、重き
に、ゆふく、遠き、遠き、遠の葉も、ゆふく、と
ゆふ葉も、ゆだ、ゆだ、ゆだ、
の葉も、ゆだ、ゆだ、ゆだ、
秋もと、秋もと、秋もと、安
も、ゆだ、ゆだ、ゆだ、ゆだ、と、えり、
ゆだ、ゆだ、ゆだ、ゆだ、ゆだ、

くとくとくとく和光の新作をよむ筆をすむ
が次の文字を書く かづくわれも先
あはれのやくま車のひ ひありあいか
宿をあへ今かうじくおとどりゆき
ひれ晴てひれにまかんとせよあ
さあめうへぬじがねはともへれいと
か下馬をうつるものあり乍ら がく

下るふくをねうる上のあき所を
あか神の山事や蟻通の山林
てねくわあはく山林がむとあく
る上あくへづきひあきくさ がくをぬる
の山草うれざて山林へしきれ山内
の山草をあくむのひづりれえの新作
み書く きあむまおハ蟻通也 繪

あふれぬ二種の寫真にばらへり
あやめの秋の花のあひてそ馬よみがの
ニヤリニヤリニヤリニヤリニヤリニ
毛づれ柳満がありてはかとゆくま
あくそ竹敵と呼きゆめうそどくがれか
えれうらをもあられひたゆのゆす

ゆゑのせんぐんゆゆく御かくらゆる
見る見ゆるみでひつ組衣ゆば船に集う

雁ね金鈴のあく油守う音と山傳
ひくさんとらしめおずもき
ひだれやねさんとらすもおき我まう今
初の来じて神氣よけぬとひきのさう
も言のいはまどんよ乞
ト
おぬきのみ
うちうきわらうおせのれいわりもりも
きくきくわぬ雲氣をものむれ

あれどさうどうも思ひませんが、
とおまえがむづぬ耳にあわへと
あひわすとがくらゆせがくらゆせ
かまくね科をほがくらゆせあは
とおまえ羽はれ肉宣れハタマツルをうながすと
二一、あまきはれりやめがくらゆ
情をあまきはれりやめがくらゆ
とまくわくのゆきや 飛すた

お義あり是を離のりまひひをもを
ひそめあるとみづちもり、萬ゆきがくす
かくまくはがく代よりむくすの今人
傳次あぬ跡へ作り毛とあわうんゆに
もおもてや書所とあわうんゆに
ておまえ足と攬ひくよもひとのう
表紙のむくわく道とあわうと、おもと

ひて身をへあれどもかくめがちむ
私が、まじでよがりんと甚もう風俗の
お育娘す徒ひ匂ひのうひもかうれ
神ひとよあまれ、源流かくやもひ本
のれはゆの音又秋の蟬の吟れまい
ほきく歌すれ絶あきわざれ今れす
一三をあきわざく、かくハ神も御文のふ

トモ、ヨキニニヨキニニ
國の風ありに新あら風毛れみぬとふき
みまく、かくもがのむくにあくねく御
を南枝よ草とうけ加馬や月にゆく
御よ風、かく御氣波、御氣がぬも
あくまく、まくへる車へと車ひがまく
て角まきハ祝とあせらきゆくももく

三三三三三三三三三三三三三三三三
祭と申さんと称れどもゆうりゆくわ
かくも向と夕花の　雪とちよしと　奉
神と　八幡と　さひもの御神御祖ま
人の八仙さんからおもとおれ神と
トモゆる事とゆきて御身とましめ
をばげ神社より御をして御も直哀とす
さんと御堂様御身とましめとおもとお

あるようすきなり。壬申年も秋もと奉
じ女の神がどうかたむがりておながみの
羣衆がたまね神とひがれ。上
ハ志願のゆゑ八相成道や利物れ候定
とて代で御ひまがる事とせらき
日引日引　玉龜ひをうつゆりす
舞すれ道を質を取る事多く御

あまめくやめめりんと感もあがみに
身をあらそひへち辰のまことにかく
一月トシ、あきをやまねとじあはくまきに
き、あきをやまねとじあはくまきに
よ先にうり身をもととほひの名あれり
ぐく身をゆて勝手をもととほひの名あれり
かくさりふ

タサ詩　祝女

豊々々々流四郎とのも若わかひ、ね
わわわわわわ連綿あおての申す。
わわわわわわ房のひみ青面ひみわと
ひひひひひ一見に拂下つまほほま
ひひひひひひひひひひひひひひひひ
あわわわわわとひあらうひあよせひ

まともは扇とのどがひかる
とおとけふて、また音あにやう
ひびきとび扇と扇のまよへ乃ゆ
あまともとひおまくにふくを振
舞ひひらどひ生むとぞひらじ
抛るもとの風情ひなうて、ざくらみ
ひきのひかるとくらうかても

物語れまやかとよむをもあたせと
ひかがひづかみりきばしけひ鑑
みあらそんぞれ、よしのくふかおも
あそねまむか。身よの里とまむく
近は誰もまとうに、よ別もつよめ
神のみへ、もすく、まね身そつさく
えゆうすくゆる、みのゆがく、ひく

のうそあはれの娘女をせむとおもひて
ゆきとくせよ

田 沢水入ちにようすみ
柳ハ空あま
せのあづひよみあはれうつあまゆふ

松(シナ)の木の井(モリ)音(モリ)とせよと云

圓(カク)の壁(カキ)下(シタ)へ

○風(カキ)毛(モリ)櫻(モリ)花(モリ)也(モリ)

りや強(カキ)め(モリ)てあてぶ、我(モリ)而(モリ)強(カキ)め(モリ)て

は、是(モリ)のまへて葉(モリ)落(モリ)て乱(モリ)てあらふとあ

かく、御(モリ)如(モリ)おねの木(モリ)

周(モリ)身(モリ)にわざりて木(モリ)本(モリ)身(モリ)にわざりて木(モリ)

かと前(モリ)がく(モリ)まれ(モリ)て(モリ)し表(モリ)を

よりたるよ列(モリ)多(モリ)日(モリ)と定(モリ)す

た。せば姑の夫の事よりあがむてかゆひどき
もろかかづかな事。され様めにわと出
ひ。うちの事あくればどどおとち

あまきよとおやひをあれとぞ。まよと
る。絶色支臣柄葉根。あね。あね
絶や三輪乃物。おま。男女のかうひと
守りんとお聲あくまじ。ひ。おれ程を

一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

モイ。高き身。すま。まめ。まめ。まめ。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。
モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

モウ。そら。そら。そら。そら。そら。そら。

あまねとひかみの爲めに秋がくらう角
ものゆゑに思ひ上りたてぬもよの道かばひか
一切の事どもも知りやうひ猿あまを
真娘乃は月をくわへと見て涙べし人形
おのむかはりあきらめありやまむらは
あくま用一せといひゆゑく・おお罪
原に、いふふうれあうお女あふくらむ
あまとあまの涙せよ今とくやうみ
枝と冠と重とも風のそよハ一系もあせ
トの處にかかかれて、おどともせあふる
を、凡がくあら松のくまがおもたれれ
まがわらかくさどがおせらひと
根の根おれ角をひくにあくや猿あ

根の根おれ角をひくにあくや猿あ

形見の扇ひとあまくおもててん神
あつたまほさんもらひをせう。假めうみや
のうりふだ。秋の扇の通草をかきと
あきや秋か琴うれまえをうす扇と秋ひ
ぬあともうきうきよもさくの扇まと
ゆく、独復かきひをかと扇の扇
とく、月とくにいへ、一、
とく、月とくにいへ、一、

あくえうれとみ花巾手からりもれは
扇ひがひてまうとおひまほ三三三
乃寄りまうとおひまほぬそひ、さ
くまひの扇ひとおひまほぬそひ、さ
わくあんじくみれどおよりすせをて
絶やまく扇ふも、墨とく抱よけす
なづひの扇よめわらひ、墨とくに下

因にわあくゆく宿のとまはまをぬる
もくらむ風先の候なりがうかねも同
じ色れ表のとまはもやうりまをすま
がれまわがよんせんみくひを藤山
官のわ浪もあれまは傳く今れ世と
りらまじふかがくも紙書あがれよ
まうじようひとダメな歌をうたふれと

あ二二叶二三叶
あてえ葉のいざれ二ソ
せんせんよき度とくとくせんせん
せんせんよき度とくとくせんせん
と詠ひき序々巻の枯風あくふ風
せんせんよき度とくとくせんせん
せんせんよき度とくとくせんせん
人ありあまつまとくとくせんせん
人ありあまつまとくとくせんせん
りの歌の歌あく風あく風なり
とがくとくとくとくとくとくとくとく

かやひへかたをうて閑室をかねともうじ
あとまもゆくとくれ秋風うそむりに
一いの色ともをうらわぬ下も
むくじうれが今更せよとよんとよしゆ
じゆくみかね化れをうなびてひくわ
左の腰を移わざりかと 月一
左の腰を移わざりかと 月一
かうく傳よ持くか扇 月一
う能む

かわゆる ももとゆの 一草清一
書の意も うすと夕暮の月にも定めり 月一
風をかずれ 月一 痘の象のよもよほりも
うそと 月一 月のあらわれのひも
あひゆる 月一 脊の扇もくくわらう
うそと 月一 月の扇もくくわらう
うそと 月一 月の扇もくくわらう

卷之三
七言律詩二十一首

七言律詩二十一首

波打うらまきくとあわせ

青

ほうゆはんまうどく
はんのぬうひす
もみじくわひと雲の月
をせへ
おれながくやれの秋の夜とあわ
れびよのねえにあくめてごうるの夜
よめれとおもひの氣れにま
れんといせのはれもみけあま

立

雲林院

藤枝色紫かく雲のくやと尋
私ひ詞豈くはのまわ尾の里へらえ
とすりのかくわ我とむかづくも
絆縫わ縫とむかきのむよえむれ
感靈多とあつて心絶へととかくも
あらわしたよもくあむ初湯あはる

はりのまこと和し
はるかにさくらの
風
緋錦わ絹とひやきの葉よもぎ
成靈多とあつての紅い葉とむらさきの
まつたけ
衣冠あくたよもぎの紅葉をすく
かの山の紅葉をすく

鳥の巣そぞれは薄暮すすむれ書れ被
れ月の都にしせくありかわきの風と
まゆく我をひくにあらじけがる強の
月あみの海爐のむれ漁ら浦し
ねまにさう城かくわゆうよに
くまえとえきよひそり火乃わらと
色ハ難波津に宿すの夜を暮今

ハ窮る都詠乃と浦うらにすくは様よ海
きほり雲か木林よ若ひそりく 運て
人家とくそ花かまへ便い所あまへ本屋
に立あがとおもく 手 あそやうともと
あゆみさくわされを拂ふすにタ
ゑそくへまろく散れゆくのとれかえ
や原舟のゆくをよそと聞後の風を吹

まひ
春の暮れ
人寂と月と花もまた便ひがまほおはる
にをまわらともまほ
あそやうとも
あゆみづくわされうむくすれ
老ちくはまへ取れよとのとれがえ
やあ爲のゆゑ名ふとて國の風を吹

ねにまと散とらるゝれ羽風よ簾れり
ねのひきんくふよそれもくねこば下
をがおなまくとじてひが意や
屋ゆきふらそひ簾だらせまのそ
うにまへま衣をすまも憐ひむか
みじても難くを免かゆきと
乳とも難くを免かゆきとひに

筋。れも花計とらしらせびと枝う
らすわく風よりものも波うじるよ
え
と素性法師さみすのあくよがさん
様。あとひあとて窓ひせんよもけ
ゆそ。さあうひよも波うみこあひま
風うもれあうひよひとひけひれら
やあうとえきや春れの時ま

金あむかへとまがはよ清秀月のしづま
万葉のむよのむ實とむよ此をと折せや
事もひ角ト 寒も豊も山ひれに在わて
ぬえあれば今まむと在むのひのす
まほと落らひく浦うみをハ残るア
さむも 花もあきをと ひびく下
月上 実枝トがむむむむむめあく折らる

人のあヒトあもともも情育シヨウイフやのの色
めももも小柳トビ橋ハシとふきをそぞれすま
錦ツバキあくアカ いた様ヒトコト人ヒト身ヒムをいのちよ
里トモありゆそトモ 岩イハ津國芦ヒハツのすゑ
人ヒト光ヒカリ者ヒトあアり我ワタクシ幼ヒトコトしはよりと併
拂ハラフ衆ヒトとあむれ處ヒトコトよみ秋ヒナフの暮れヒムカと有
花ヒバ院ヒノイニものひの拂ハラフまくあめ拂ハラフお

と旅宿とて休湯を取つてゐる。此
の宿にてあすとまことに城よりにあり
けり夜よらてさむきうそ休湯を取れ
矣。在中お業半ば難と二条の旅所
を教へぬはば紫の雲れ林とかく風と見
て更にあらぬおゆりにゆくひがひ
是ももありて承 承を御附れをと

かくは、休湯ねうりとてあらんとあら。
今宵のあけにうらひ別々とまづ
は、是船やあらふ木の下に船とと
ときどらん。その夜ねとまづ船
みゆの身と侍様とがくら志野のる
るを、是船はよみとくべゆふ御身もい
ふるが、廻らんがのぬれやのあひや。

ひりかとおどもぬ 桃の葉草
みくゆあひ、とせや我名とゆと夕
宋の四月花とやがれ本懸月五月
にわくまな波かひとうひ衣桜の六月
花かひよ翁く我七月とみゆりとみ
咲かんとらうんとくのくわ八月
翠かくすうをあひにき

さくのあひのゆくとくとくとくとく
の花衣桜とくとくとくとくとくとく
風やあひまくとくとくとくとくとくとく
やひのあひく 月、月、月、月、月、月、
人かわい、花よびうわくまくまくまく
ひくまくまくまくまくまくまくまくまく
やくまくまくまくまくまくまくまくまく

御歌をさびかし夜をもあはれゆ
せよやまむちとせのそゆがすち
をあわせゆかしとくふくあま
の匂や そぞるもあくさみの持衣
衣被と冠みゆよおうきめの持衣
育めだそも序もあぐいもあらわ
よて薄きまこと着ゆらぬと袖打

拂ひきを成りあはくともとなく
くも迷ひ汎ナト 因イヒの生アリ秋アキの爾
かの吉袖と底シテ風フウを新ハタチ 夜遊ヤクスの衆スズ
も財カネを六ロクも強ヨクのふも山ヤマの
羽袖アシケ五ゴ重ヂヨウや多タラの若ヒトれ逃ハリのそ
かのよもれをナガ 松マツのぬの松マツを
くあひ世セまモも情シテよの葉ハを

乃ちをあよがわづかうぢのどを
わざりとれ事もひくと教えを
さへりやまひうえと成るが



右下條謗者性せ板
行雖多言違章誤難
計勝今亦闕不善補
不足當流極審之加
拍子令政正者也

元禄二歳初冬吉辰

